令和元年記念 江戸時代 長久保赤水 が作り上げた

『改正日本輿地路程全図』

原寸大レプリカ(複製図)を**定価1,000円**(税別)**で販売中！**

〔令和元年5月1日発行〕

伊能忠敬は赤水図を測量に携帯！
全国を遊歴した吉田松陰も絶賛！

長久保赤水顕彰会では
"学ぼう赤水を　教科書に載せて　広げよう世界へ"を掲げ、
●長久保赤水関係資料群の国の重要文化財指定を目指します
●「ひよっこ」の次は大河ドラマ「長久保赤水伝」の実現を目指します

長久保赤水顕彰会の書籍と切手

好評発売中

長久保赤水書簡集
続長久保赤水書簡集　各1，000円（税別）

マンガ長久保赤水の一生
マンガ長久保赤水の生涯　各1，000円（税別）

オリジナルフレーム切手（1シート）1，300円（税別）

マンガ長久保赤水物語　500円（税別）

赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期と時代背景

日本地図学会会員・長久保赤水顕彰会理事　三浦邦明

付　近代測量１５０ｔｈ　茨城は地図と測量の揺籃（ゆりかご）の地

大判の「蝦夷之図」と小判の「蝦夷松前図」は江戸幕府の蝦夷地調査隊からの依頼で作られたか？

長久保赤水顕彰会会長　佐川　春久

長久保赤水の「赤水図」（改正日本輿地路程全図）には、北海道が描かれていません。しかし、寛政元年（１７８９）頃に、大判の「蝦夷之図」（個人所蔵１４５．３×１７２．４㎝）を著わし、後に、小判の「蝦夷松前図」（明治大学蘆田文庫所蔵：２５．３　×３９．６㎝…蘆田文庫特別図録 Ｐ１８＜２００４年１０月２日発行＞より）を出版している事は、殆ど知られていません。

田沼意次時代の天明５年（１７８５）になって、ようやく江戸幕府は蝦夷地に調査隊を派遣しました。しかし、調査差止めで調査隊が戻ってきた時には、田沼意次は、すでに、失脚していました。このため、幕府は報告書を受け取らなかったといわれています。そんな中でも、調査隊は「蝦夷拾遺」と「蝦夷地墨引絵図」、「蝦夷輿地全図」などを残しています。

この「蝦夷輿地全図」（函館中央図書館所蔵：１３０　×９０．２㎝）には、「天明五年乙巳　御老中田沼主殿頭殿　水野出羽守殿　勘定奉行松本伊豆守　右依御下知廻島見聞之図也」とともに、御普請役の山口鉄五郎高品、庵原彌六宣方、皆川沖右衛門秀道、青島俊蔵軌起、佐藤源六郎行信、御雇の里見平蔵行義、引佐新兵衛正知、大塚小市郎清孝の８人の調査隊の名前があります。この図は、青島俊蔵の作図で、下役の大石逸平と最上徳内（竿取の役）名前がありませんが、この二人は青島俊蔵の配下で、両人が作図し佐藤源六郎の名で公儀に報告した素図をもとに記き改めたといわれる図です。また、長久保赤水が書いた「蝦夷之図」には、鈴木清七芳方の名があり９名です。さらに、毛利家文庫の「蝦夷地図」には、鈴木清七芳方、大石逸平直行の１０名の名前が残されていますが、調査当時竿とりの最上徳内の名は出てきません。

蝦夷地の調査隊が作った「蝦夷輿地全図」は、未発刊の地図です。ところが、長久保赤水が書いた「蝦夷之図」には、名前の後に「この図は佐藤源六郎より乞需（こいもとめ）（求め願うこと）之を写した」とあります。幕府の命令で蝦夷地に赴き、その結果を世に知らしめたいにもかかわらず、降格処分や、遠島処分などを受けた調査隊が、長久保赤水にその図の出版を依頼したものと推察できます。

すでに、「赤水図」を世に出していた長久保赤水以外に縋るところがなかったものと思われます。赤水は、幕府の調査隊の普請役の佐藤源六郎らの報告書「蝦夷拾遺」と「蝦夷地墨引絵図」などをもとに、さらに、サイズの大きい手書き図の「蝦夷之図」を書いています。

ところが、赤水の日本地図、中国地図、世界地図、中国歴史地図帳などには、必ず序文、凡例、官許、版元などが記載されています。この「蝦夷之図」は手書き原稿なので、出版にあたっては、版元や著名人に依頼をしなければなりません。しかし、蝦夷地の開発計画は、幕府の一部の人たちのものでしかなく、一般庶民の関心を得ることが出来ず、版元の協力も得られず、大判の「蝦夷之図」の出版は断念せざるを得なかったものと思われます。その途中のいずれかの時期に、赤水の原稿が佐藤源六郎らの清書することとなって毛利家に渡り、毛利家文庫が所蔵する「蝦夷地図」となったものと思われます。

その後、赤水は、小判の「蝦夷松前図」を出版していますが、序文、凡例、官許、版元なども記載されておらず、図説も付けられず、赤水の２文字と玄珠の落款、４行の短い説明があるだけです。この「蝦夷松前図」も流布したものの、その数は少なかったようです。蝦夷地の調査隊に出版を乞われた赤水なりの答えがこの「蝦夷松前図」に結実したのではないでしょうか。もしかすると、水戸藩にお願いして出版したのかもしれません。

日本地図学会会員で、長久保赤水顕彰会理事の三浦邦明氏が、多くの蝦夷地の地図を調査され、令和元年度の長久保赤水顕彰会総会で発表されました。今回、長久保赤水顕彰会でこの論文を小冊子にしました。「蝦夷之図」「蝦夷松前図」についての皆様方のご意見をお待ちしております。

蝦夷の図の調査報告するに当たって

日本地図学会員
長久保赤水顕彰会理事　三浦　邦明

赤水が描いたとされる「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」は、蝦夷に関する情報が少ない中、どの情報を採用するか迷う長久保赤水の姿が浮き彫りにした作品であったと考えられます。以前から長久保赤水は、蝦夷に関心を持ち江戸初期に作られたジャガイモの様な蝦夷の図を見ており（後ほど本文でも紹介する）、「改正日本輿地路程全図」に津軽海峡に面した蝦夷の松前藩の一部を書いています。

今回紹介する蝦夷に関する図は、天明の蝦夷見分隊が現地に赴き実際に実地見分した情報に基づき、樺太からオホーツク海と千島列島をも含む「蝦夷之図」を作成したものです。天明の蝦夷見分は、アイヌの言語から生活様式、動植物と産業も含めた地理史全体に及んだ広範囲な調査であり、調査が途中で打ち切られたがゆえにアイヌの描いた地図を採用するなど十分でないところもありますが、幕府による初めての本格的な調査でした。

天明の蝦夷見分とは、田沼意次の時代に行われた蝦夷見分ですが、意次失脚と共に時の幕府は蝦夷見分を中止し、見分士の全員解雇と報告書をも受け取りの拒否に及び、解雇された見分士の一人である佐藤源六郎が調査情報を残すべく、「改正日本輿地路程全図」を作成し全国的に有名であった水戸藩の地理学者長久保赤水に見分による地図を写してほしいと懇願して制作したのが今回紹介する「蝦夷之図」です。

元来江戸の初期において水戸藩は、水戸光圀の命により快風丸を仕立てて蝦夷地の石狩付近を調査させるなど、以前から蝦夷地に興味を抱いていたこともあって、幕府の受け取り拒否にあった資料を残そうとすると、幕府に対抗できる御三家である水戸藩で全国的に有名な地理学者に資料を託そうとするのは当然のことであったと考えられます。この長久保赤水という人は農民の出で水戸６代藩主の治保（はるもり）公の侍講になった方で当時としては異例の方であり、異例をも認める水戸藩主も慧眼の持ち主であったことが分かります。

今回この「蝦夷之図」を作成するにあたって原本と考えられる「蝦夷地墨引絵図」を紹介し、あわせて赤水が作成した「蝦夷之図」と瓜二つの「蝦夷地図」が遠く離れた山口県の毛利家にも有ったことを紹介します。蝦夷に関心を寄せていたのは水戸藩だけでないことが窺え、さらに赤水はこの手書きの「蝦夷之図」の他に「蝦夷松前図」を刊行しており、この「蝦夷松前図」が「蝦夷之図」と全く似ていないのはなぜかも検討を加え、「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期を推定しました。

本来であれば水戸藩の近隣に見分士の子孫が居たことが確認されていることから、もう少し人的つながりも含めて詳細に検討したいところですが今後の調査に委ねるとして（本文の最終項でも述べていますが水戸の彰考館＜現代の徳川ミュージアム＞資料の調査）、今回は赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期を現状の資料から推定したのでここに報告します。

赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期と時代背景

長久保赤水顕彰会総会
高萩市中央公民館
令和元年5月19日（追記改定令和元11月6日）

長久保赤水顕彰会　理事　三浦邦明　　会長　佐川春久

1. はじめに

- 今まで赤水の「蝦夷之図」(1)と「蝦夷松前図」(2)は、顕彰会でも取り上げられ、その存在は分かっておりましたが、時代背景や制作時期等の詳細な検討はなされてこなかった。
- 本日は、単なる紹介ではなく時代背景や地図の内容を詳細に検討し、その制作時期等を報告する。

(1) 長久保源藏氏による「人間長久保赤水について」、高萩市民フェスティバル‘95（平成7年）、 長久保赤水顕彰会と高萩郷土史研究会合同公開研修会
(2) マンガ長久保赤水の生涯　付　長久保赤水海防意見現代語訳、平成29年、200頁

2. 趣旨

- 今回検討する赤水の「蝦夷之図」は、天明5～天明6（1785～86）の蝦夷見分の資料(注)に基づくもので昭和42年に調査され書籍(3)にて報告されていたが長らく所在不明で制作年代が特定されておらず、赤水生誕300年記念の年に数十年ぶりに所在が分かったのを機会に長久保赤水顕彰会として調査すべきものと考え実施した。
- 今回の調査に合わせて、赤水による刊行図である「蝦夷松前図」についても調査した。

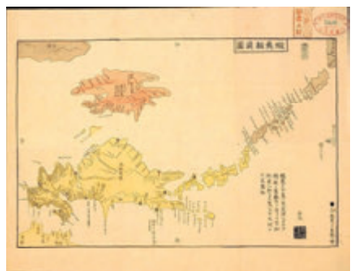
(注) 田沼意次の命で行われた蝦夷見分の報告書である「蝦夷拾遺」：普請役山口鉄五郎、庵原彌六、皆川沖右衛門、青島俊蔵、佐藤玄六郎による報告書で、組頭金沢安太郎を介して松本伊豆守に報告するも受け取り拒否に遭い市中に埋もれてしまう。なお、「蝦夷拾遺」には佐藤玄六郎と記載があるが、「蝦夷之図」、「蝦夷地図」、「蝦夷輿地全図」には佐藤源六郎と記載されている。蝦夷拾遺を纏めた本人が佐藤玄六郎と書いているのでそれに従って佐藤玄六郎と記載する。

(3) 長久保光明著「地図史通論」暁印書館、平成4年、453～467頁。 長久保片雲著「長久保赤水伝」暁印書館、昭和53年、288～300頁。 これらの書籍には概略的制作年代が記されているが、今回の調査で再検討した。

3. 調査対象

- 調査対象の手書きの「蝦夷之図」(4)と刊行図の「蝦夷松前図」(5)を以下に示す。
- 双方とも田沼意次の命による天明5，6年（1785～1786）の蝦夷見分情報でありながら地形がかなり違う事が分かる。

(4) 北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」。
145．3×172．4cm



(5) 北海道大学所蔵の「蝦夷松前図」
35×44cm
（明治大学蘆田文庫の模写図）

4.「蝦夷松前図」が刊行される前の天明期の蝦夷図

- 左図：天明6年（1786）に林子平が発表した「三国通覧輿地路程全図」(6)
- 右図：天明8年（1788）に古川古松軒が発表した「松前蝦夷地之図」(7)

（6）高木著「近世日本の北方図研究」
付図5

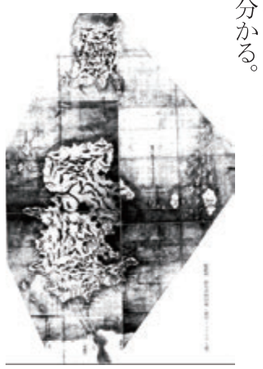
（7）函館市中央図書館
デジタル資料館

古川古松軒が林子平の図に間違いが多いと批判する図も、松前藩の図に地誌を追加しただけなので図の正確性は似た者同士である。

5. 天明以前の蝦夷の図

- 左図：元禄13年（1700）の樺太も含む蝦夷の図「松前嶋絵図」(8)。
- 右図：赤水も見たと記載されている徳川ミュージアムの「松前図蝦夷図」(9)。

（8）高木著「近世日本の
北方図研究」、31頁

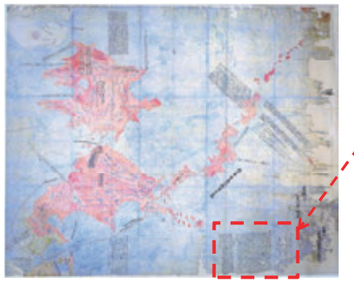


（9）高木著「近世日本の
北方図研究」、25頁

右の図は、赤水閲と記され、正保（しょうほう、1645～1648）日本総図系であり、松前藩提出の図は多少変更して幕府へ提出していることが分かる。

6. 赤水の「蝦夷之図」と瓜二つの毛利家「蝦夷地図」

- 左図：赤水の「蝦夷之図」(4)で、赤水述と記載しつつ、図は佐藤源六郎の求めに応じ佐藤源六郎の物を写したと記載が有るので、地誌は赤水側が記載し、図は源六郎のものと考えられる。
- 右図：赤水の図と瓜二つの山口県文書館毛利家蔵の「蝦夷地図」(10)で、地誌も似ているが赤水述部が無く、地誌内容はほぼ同一。
- 何れも天明5,6年の蝦夷見分によるものであり、似ているので赤水と同時期かいずれかが写したと考えられる。次項に地誌の同一性を示す。



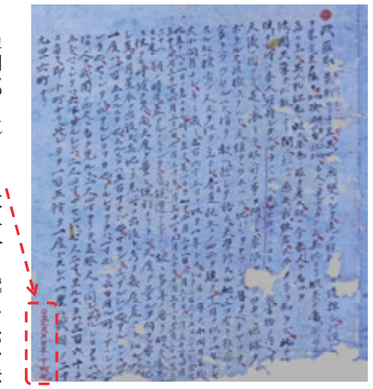
（4）北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」
145．3×172．4cm

（10）山口県文書館毛利家蔵の
蝦夷地図、吉田専門研究員
からの写真
150．4×166．1cm

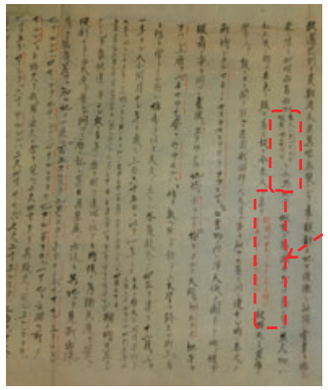
毛利家品は赤水図の様に写図との記載が無く、樺太の北緯49度付近に説明がなく、航路の違いはあるが、地誌はほぼ同一

6.1赤水の「蝦夷之図」と瓜二つの毛利家「蝦夷地図」の地誌

- 例えば、前項の網目印の地誌は、書出しが『欧羅巴ノ莫斯哥未亜　其ノ勢無雙ニシテ』から始まり、「赤蝦夷風説考」下巻のカムサスカ　オロシヤ私考の事に出てくる言い方に近く、その後は「蝦夷拾遺」の赤人の説が続く等、打合せや真似をしないと出来ないものだと分かる。



（4）北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」の
「右下の地誌」



（10）山口県文書館毛利家蔵の
蝦夷地図、吉田専門研究員
の写真の「右下の地誌」

追加部：エルタ日本十町也。なお、赤水は全ての文に読み易いように句点がある。

赤字部が追加された部分で6．3項で詳しく説明する。

6.2 赤水の「蝦夷之図」と毛利家「蝦夷地図」の地誌の特徴（相違点）、その1

- 文章は、主に「蝦夷拾遺」（天明6年（1786）、5人普請役共著）の地理大概下と赤人の説で、「蝦夷志」（享保5年（1720）、新井白石著）景行天皇の部分、「赤蝦夷風説考」（天明3年、工藤平助著）の序と下巻等を参考に記載。
- 赤水の「蝦夷之図」に有るもの（赤水ならではのもので、毛利家蝦夷地図には無い）

①この図は佐藤源六郎より乞い求め写すとある。

・地図の右端の下部分に：此図者（は）佐藤源六郎ヨリ乞需（こいもとめ）写之也（注1）と有り、前項2の注記の通り幕府の「蝦夷拾遺」受け取り拒否に依り、批判されにくい御三家で蝦夷に関心が有る水戸藩の全国的に有名な地理学者赤水に託すしかなかった（注2）。

②赤水が自ら名乗（赤水＝玄珠；はるたか）って赤水による記述

・右中段；珠案垂仁天皇ヨリ寛政マテ千七百七十四年。

・樺太脇；珠按極星出地四十九度アルベシ自ソウヤ至此海陸路大率百六十里海陸道迂曲一度日本道四十里已ツモル）

③赤水の図である事を宣言

・地図右端の下の部分に：「蝦夷之図」に常陽水戸赤水述　矢指長久保伝五兵衛（赤水の四代目子孫）所持と記載有り（地図に上記①②が書いてあるので伝五兵衛が赤水述と記載するは当然）。

（注1）北茨城の方の図ではこの部分に虫食いが有り、長久保光明著地図史通論455頁を参照。
（注2）筆写は、長久保光明著地図史通論457頁に依れば赤水のいとこの子長久保中行の可能性を示唆。

6.3 赤水の「蝦夷之図」と毛利家「蝦夷地図」の地誌の特徴（相違点）、その2

- 赤水の「蝦夷之図」にのみ有るもの

①エトロフ島脇；此三十七島日蝦夷千島

②ウルップ島脇；莫斯哥未亜（ムスコフビア）ハ欧羅巴ノ界ニアリ

（突然、ウルップの脇にウルップに関係ない文が有るので、写すと言うより主体的に書きだそうとしていると考えられる）

③山丹部分；極星出地五十度

④主な物としては石狩川近傍の地誌（なお、産物は赤水の方が多い）

- 毛利家蔵蝦夷地図にのみ有るもの

①右下；蝦夷ハ<u>カムサツケ</u>ト云、・・・・蝦夷呼日ホリシイシャモ譯（と）日ホリ赤也　シイ善也　シャモ人也

- 毛利家蔵「蝦夷地図」の地誌は、赤水述部が無く、「蝦夷之図」に配置された文章と対比できるほど似ているが、全体的に省略されている部分がある。

6.4 「蝦夷之図」と「蝦夷地図」の作成者

- 山口県文書館毛利家所蔵図書に「蝦夷拾遺」等の所蔵がない事（17）から毛利家側で制作したのではない。
- 赤水の「蝦夷之図」と毛利家蔵の「蝦夷地図」は、地誌の書き方、配置が似ているが、航路の数や経路も違うことから、毛利家蔵の「蝦夷地図」は赤水側が書いたわけではない。

↓

- 毛利家蔵「蝦夷地図」は、佐藤源六郎側が書いたものと考えられる。
- 珠按とか赤水述などと記載の赤水の「蝦夷之図」は赤水側が作成。

↓

- 赤水とて地図に地名や航路を書くには、佐藤源六郎側と何度か接触が有ればこそ出来たと考えられる。

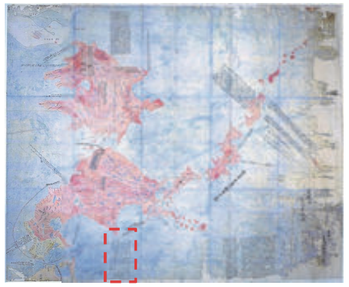
（17）山口県文書館簡易検索及び吉田専門研究員への問い合わせの回答

6.5 赤水の「蝦夷之図」と毛利家「蝦夷地図」の制作開始時期（どちらが先に始めたのか）

- 地図を写す側に多くの情報がない限り、一般的には地誌を多く書いた方が先に制作し、写す側は同等か少なくなるはずである。よって佐藤源六郎側の元図を赤水が写させてもらって、赤水側が制作中か終了後に佐藤源六郎側が「蝦夷地図」を書いたので、佐藤源六郎側の「蝦夷地図」の方が纏まった仕上りになったと見るのが自然である。
- しかし、6.1の毛利家の蝦夷地図に赤字で記載した部分に『蝦夷呼日ホリシイシャモ譯（と）日　ホリ赤也　シイ善也　シャモ人也』が有り、アイヌが赤人を褒めている部分を赤水は無くしている。赤水がロシアを褒めるのかという疑問（穿った見方）から赤水側が地誌を写した方とも考えられる。勿論佐藤源六郎側が上記の様に赤水の図を見て足りない事を追記した可能性も考えられる。
- 全体的に見て赤水側の地誌の書き方は自由で、ウルップに関係ない文言がウルップ脇に出てきたり、源六郎と付き合って「蝦夷拾遺」等の地誌を写す場合でも珠按と書いてるので、赤水側が地誌を早く書き上げたか、両者が打合せしながら制作したと考えられる。

7.「蝦夷之図」の原図を探る為「蝦夷輿地全図」と比較

- 左図：赤水の「蝦夷之図」(4)である。
- 右図：普請役青島俊蔵が書いたとされる「蝦夷輿地全図」(11)である。
- 網目印の部分に引佐新兵衛物語が書かれている。
  - ・「蝦夷之図」には、西蝦夷と東蝦夷の2つの引佐新兵衛物語がある。
    （因みに、毛利家の「蝦夷地図」には東蝦夷の引佐新兵衛物語だけがある）
  - ・「蝦夷輿地全図」には、東蝦夷の引佐新兵衛物語だけがありそれを否定している。



(4)北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」
145．3×172．4cm

(11)青島俊蔵が書いたとされる
「蝦夷輿地全図」（北街道大学
の北方資料データ）
90．2×130cm

寛政元年7月に書いた割には「蝦夷輿地全図」は、図が概略的で文章も間違いや抜けがある。

8.「蝦夷之図」の原図を探る為「蝦夷地墨引[絵図」と比較

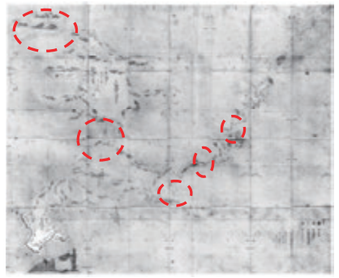
- 比較のため、楽翁公伝の第十五図の「蝦夷地墨引[絵図」(12)を右に示す。
- 地形の違いは、アムール川河口部が「蝦夷地墨引[絵図」では山になり、山並みは違うがそれ以外の地形はほぼ同じである。

(4)北茨城の方所蔵の赤水の
「蝦夷之図」

(12)渋沢栄一著「楽翁公伝」岩波
書店、昭和12年、第十五図、
「蝦夷地墨引[絵図」

9.「蝦夷地墨引[絵図」の詳細（模写図添付）

- 「蝦夷地墨引[絵図」(12)(13)の地形は、赤水の「蝦夷之図」と毛利家の「蝦夷地図」の地形とほぼ一致し、海岸に多くの地名が書かれていて参考図に最適である。
- 違いはアムール川河口が山になっていて、地図情報が殆ど無い。
- 航路は宗谷～樺太、根室～国後、国後～エトロフ、エトロフ～ウルップへの4か所しか表示されていない。
- 「蝦夷地墨引[絵図」は、文献（13）によると天明6年と記載ある。



(12)渋沢栄一著「楽翁公伝」岩波
書店、昭和12年、第十五図、
「蝦夷地墨引[絵図」

(13)高木著「近世日本の北方図研究」
北海道出版企画センター、2011年、
106頁、「蝦夷地墨引[絵図」の模写図

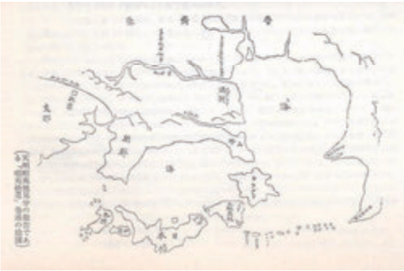
10.「蝦夷輿地全図」の詳細

- 「蝦夷輿地全図」(11)は、青島俊蔵が書いたとされ、図中に寛政元年7月の作成日時が書かれていて、更に「蝦夷之図」（西と東蝦夷の引佐新兵衛物語を記載）と「蝦夷地図」（東蝦夷の引佐新兵衛物語記載）の左下に記載されている引佐新兵衛物語（東蝦夷のみ記載）を否定している。
- 引佐新兵衛物語を「蝦夷之図」や蝦夷地図と同じ位置で否定していることによって、当然であるが青島俊蔵は「蝦夷之図」か蝦夷地図を知っていたことになり、「蝦夷之図」と「蝦夷地図」は、寛政元年7月以前の作である事が分かる。
- 次の頁の「蝦夷拾遺」の挿絵(14)の様にアムール川河口部が大きくなっている。

(11)青島俊蔵が書いたとされる
「蝦夷輿地全図」（北街道大学
の北方資料データ）

10.1 「蝦夷輿地全図」の詳細（追加）

- 「蝦夷輿地全図」は、寛政元年7月の作でありながらなぜ挿絵[14]の様に概略的なのか。その作成時期は蝦夷の目梨に於ける騒動調査のため再雇用の青島俊蔵が野辺地に居る最上徳内と会った時期で、最上徳内が西蝦夷へ、青島が東蝦夷へ行くに際し青島にとって地図情報が欲しい時期で天明見分時に作った下絵を基に大急ぎで作った為と考えられる。



(14) 照井著「天明蝦夷探検始末記」八重岳書房、昭和49年、79頁、「蝦夷拾遺」の挿絵

（11）青島俊蔵が書いたとされる「蝦夷輿地全図」（北街道大学の北方資料データ）

11.「蝦夷地墨引[絵図」と「蝦夷輿地全図」の関係

- 寛政元年7月（青島と徳内が野辺地で会った時期）に概略的「蝦夷輿地全図」[11]を自信を持って作ったのは、①概ね合っていると考えたのか、あるいは②「蝦夷拾遺」の挿絵にこだわったかの2つが考えられる。
- 東蝦夷を見てきた最上徳内は、襟裳岬から厚岸に掛けて大きく凹んでいないし、択捉もタツノオトシゴ状になっていないと感じていたので「蝦夷輿地全図」を作ったのではないか。（分かりやすくするため高木著の「蝦夷地墨引[絵図」[13]を下記に示す）

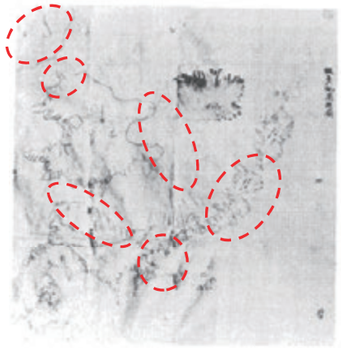
（13）高木著「近世日本の北方図研究」北海道出版企画センター、2011年、106頁、「蝦夷地墨引[絵図」の模写図

（11）青島俊蔵が書いたとされる「蝦夷輿地全図」（北街道大学の北方資料データ）

12.「蝦夷之図」の原図確認の為「蝦夷地周廻図」と比較

- 赤水の「蝦夷之図」に似た図に「蝦夷地周廻図」[15]がある。
- しかし、丸印部が違う事から赤水の「蝦夷之図」の原図ではない。

（4）北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」



（15）水戸彰考館蔵「蝦夷地周廻図」天明6年、教育出版センター「蝦夷古地図」昭和60年、74頁

13.「蝦夷地墨引[絵図」と「蝦夷輿地全図」の麁（あら）絵図のいずれを選定して「蝦夷之図」の原図にしたか

- 「蝦夷之図」は、「蝦夷拾遺」の情報を基に作成したので、「蝦夷拾遺」を纏めるまでに書いたと言われている何種類かの図の中からどれを採用するかが課題となったはずである。
- 「蝦夷輿地全図」は、青島俊蔵による地図[16]であり「蝦夷拾遺」の麁絵図[17]を基にしたと言われている事から、何種類かの地図があった事は確かである。
- 「蝦夷之図」の原図は、形状が非常に似ている「蝦夷地墨引[絵図」と同等ものと考えられ、その中でなぜ麁絵図を選定しなかったのか。

↓

- 「蝦夷地墨引[絵図」（同等の物）は形状が複雑であり、単純に大雑把な図より複雑な形状を正と見て選定したと考えられる。

（16）照井著「天明蝦夷探検始末記」八重岳書房、昭和49年、325頁
（17）同上文献、121頁

14. 赤水の「蝦夷之図」の制作時期

- 赤水の「蝦夷之図」に佐藤源六郎の依頼により図を写したと記載が有るので、天明の蝦夷見分後に作成された。
- 蝦夷見分資料（「蝦夷拾遺」も含む）は提出後、受取り拒否に遭った天明6年10月22日後11月4日に佐藤らが解雇され、残務処理で遅れて青島も解雇された天明7年3月下旬[18]以後に赤水側に情報提供が有ったと見るのが自然の流れである。
- 国後とメナシ（目梨郡羅臼）でのアイヌ反乱を調査するため青島らが再雇用された寛政元年（1789年）6月20日から、野辺地（青森）に居る徳内と会っている7月に作成した「蝦夷輿地全図」にわざわざ東蝦夷の引佐新兵衛物語を否定しているので「蝦夷之図」や「蝦夷地図」を知っていた（少なくとも東蝦夷の引佐新兵衛物語の有る「蝦夷地図」は知っていた。この事から「蝦夷地図」は佐藤源六郎側が書いた査証とも考えられる）。

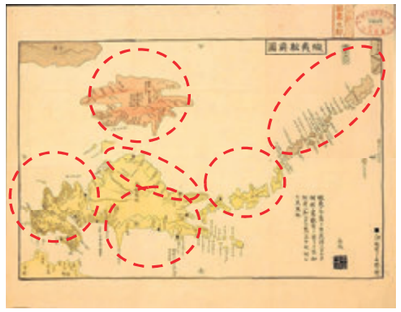
- 以上の事から赤水の「蝦夷之図」の作成時期は、天明7年3月下旬～寛政元年7月までの間と考えられる。

（18）照井著「天明蝦夷探検始末記」八重岳書簡、昭和49年、354～355頁

15. 赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」

- 右図が赤水の「蝦夷松前図」[19]であり、その違いを〇印で示す。
- 「蝦夷松前図」に於ける地形以外での大きな違いは、
  ①ウルップ以北の千島にロシア語島番号が記され、色が違う。
  ②地形と地名以外の航路や地誌が記されていない。
  ③「蝦夷之図」に於ける樺太がよりひしゃげた形になっている。

（4）北茨城の方所蔵の「蝦夷之図」



（19）北海道大学蔵「蝦夷松前図」
北海道大学北方資料データベース

16. 赤水の「蝦夷松前図」と「蝦夷輿地全図」の比較

- 「蝦夷松前図」[19]の概略的地形に似た「蝦夷輿地全図」と比較する。
  ①「蝦夷松前図」の樺太は「蝦夷之図」のものを更に潰した形である。
  ②同じ様な所は、襟裳岬から厚岸が平坦で、択捉はかりんとうの様な棒状になっている。それ以外すべて違う。
  ③「蝦夷輿地全図」にはウルップ以北の千島にロシア語番号が無い。

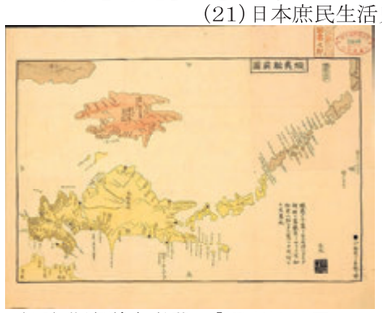
（19）北海道大学蔵「蝦夷松前図」
北海道大学北方資料データベース

（11）青島俊蔵が書いたとされる「蝦夷輿地全図」（北街道大学の北方資料データ）

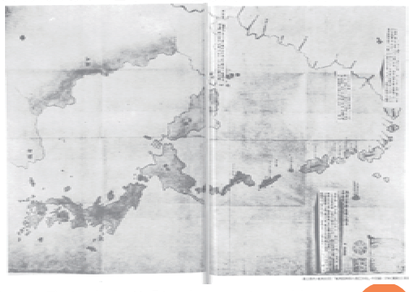
17. 「蝦夷松前図」と最上徳内の「蝦夷全図」の比較

- ウルップ島以北の千島列島に初めてロシア語島番号の付いた最上徳内の「蝦夷全図」[20]との比較
- 寛政2年6月に制作した「蝦夷国風俗人情之沙汰」の「蝦夷全図」と地形は違うが、「蝦夷松前図」が千島のロシア語島番号を採用したので寛政2年6月以降か、本多忠籌（ただかず）に献上した9月以降の制作と考えられる[21]。

（21）日本庶民生活史料集成第4巻、三一書房、1969年、440頁



（18）北海道大学蔵、「蝦夷松前図」
北海道大学北方資料データベース



（20）最上徳内著「蝦夷国風俗人情之沙汰」付図の「蝦夷全図」、教育出版センター、蝦夷古地図、72～73頁

17.1 寛政2年の最上徳内の蝦夷関連図

- 寛政2年（1790年）当時の徳内の「蝦夷草紙附図」(22)(23)は、「蝦夷拾遺」のものより更に精度が良くなっている（前の図20も含め5つ存在）。付図の詳細は、北海道立図書館の蝦夷草紙の付図参照の事。

（22）北海道立図書館蔵、「蝦夷草紙附図」、本蝦夷と国後、寛政2年

（23）北海道立図書館蔵、「蝦夷草紙附図」、樺太、寛政2年

17.2「蝦夷松前図」の制作時期（最上徳内の図から）

制作時期（徳内によるロシア語島番表記後）は、以下の3つが考えられる。

- 寛政2年9月本多忠籌（ただかず）（陸奥泉藩藩主、4月より老中格）が尾張宗睦（むねちか）に宛てた報告書で、すでに最上徳内と打合せし召し抱えたとある(24)ので、➡ これが一番早い制作時期でこれ以降。
- 次の機会は、寛政3年10月に「蝦夷草紙」を「蝦夷国風俗人情之沙汰」と言い換えて本多利明が幕府側に献上(25)したとあるので、➡「蝦夷松前図」の制作はこれ以降。
- 赤水が赤水と名乗るのは、長久保光明著書(26)に寛政3年8月1日からと記載があるので、➡「蝦夷松前図」の制作はこれ以降。

（24）浅井有子著「北方史と近世社会」清文堂、1999年、63～65頁
（25）森銑三著「学芸の人々」二見書房、昭和18年の最上徳内十二章27頁
（26）長久保光明著「地図史通論」暁印書館、平成4年、442頁

17.3 徳内の図形がなぜ赤水の「蝦夷松前図」に反映されないのか

反映されない理由

- 竿取り最上徳内の蝦夷草紙関連地図は、「蝦夷拾遺」を纏めた方（青島）による寛政元年7月の「蝦夷輿地全図」と全く異なっており、科学者赤水は「蝦夷輿地全図」の影響を受けつつ（樺太の扁平化）、「蝦夷拾遺」と照合できるもの（青島の「蝦夷輿地全図」も含む）だけを反映したと考えられる。
- 「蝦夷拾遺」は、天明6年に提出するも受け取り拒否に有ったとはいえ、普請役5名の報告書であり、その文中に島名に対するロシア語島番が併記されていたので、赤水としても徳内に従って「蝦夷松前図」にロシア語島番を反映させることが出来たと考えられる。

「蝦夷松前図」の完成時期を考えるうえで

- 徳内が普請役になったのは、寛政2年12月(27)であり、普請役になってからの地図作成は寛政4年になされ徳内原図(28)と呼ばれ、国内では発見されていないが、シーボルトの日本図の中に反映され、かなり精巧なものであったことが分かっている。

（27）島谷著「最上徳内」吉川弘文館、昭和52年、77頁
（28）同上、278頁

17.4「蝦夷松前図」の完成時期

- 寛政4年当時の最上徳内原図は、まだ国内では見つかっていないがシーボルトに渡っていて、シーボルトの地図(29)の一部になっているものを以下に示す。格段に精度が増している事が分かる。
- 寛政2年の徳内の蝦夷図も精度が上がっているのに更に精度が上がった図を赤水が見ていたとすれば、概略的な「蝦夷松前図」を刊行するであろうか。

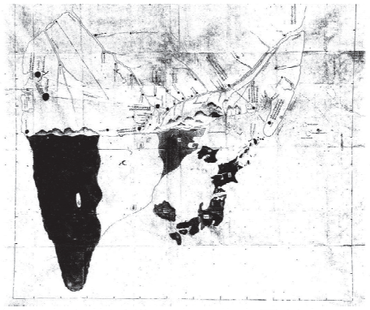
徳内の図
根室～知床半島～国後

徳内の図
津軽海峡周辺

（29）教育出版センター「蝦夷古地図」の蝦夷古地図、昭和60年、91頁

17.5 寛政4年9月大黒屋光太夫持参図を赤水写す

- 赤水は最上が持ち帰った「赤人所持蝦夷地図」(30)と似た光太夫持参図を写していた(32)。楽翁公伝の図(30)は薄いので、高木氏の物(31)を示す。樺太も本蝦夷も潰れているが、赤水の「蝦夷松前図」や「蝦夷輿地全図」ほど潰れておらず、「蝦夷松前図」はこれ以前の制作と考えられる。



(31)高木著近世日本の北方図研究、
北海道出版企画センター、2011年
117頁、「赤人所持露西亜図」、寛政4年

(32)明治大学蘆田文庫古地図展
パンフレット2001年、寛政4年
「大黒屋光太夫持参魯西亜図」

(30)渋沢栄一著「楽翁公伝」岩波書店、昭和12年294頁、第十三図、「赤人所持蝦夷地図」
(31)高木著「近世日本の北方図研究」北海道出版企画センター、2011年、117頁
(32)明治大学蘆田文庫古地図展パンフレット

18. 赤水の「蝦夷松前図」の必要性

- 概略的な「蝦夷松前図」を刊行した理由は、以下と考えられる。

【前提】

- 天明7年3月下旬以降制作してきた「蝦夷之図」が、寛政元年7月に出された「蝦夷輿地全図」の地形等が異なる事によって(航路に至っては宗谷～樺太南端のシラヌシ間に1本しかなく)、地形の大幅に見直しが必要となった。
- 蝦夷騒動後松前藩が寛政2年4月に蝦夷地改正令を出し(33)、幕政も本多忠籌(ただかず)に依って変わり、寛政2年12月に徳内は普請役に昇格して蝦夷の調査と御救(おすくい)交易状況の確認を開始した(34)。

【刊行図の必要性】

- 開発には、最新の地図が必要で、「蝦夷輿地全図」を参考に新しい地形に多くの地名を記載し、ウルップ以北にロシア語島番号を併記し、歯舞色丹諸島を追加し、青森～松前の航路1本だけを記入した「蝦夷松前図」を刊行したと考えられる。因みに、刊行されなかった蝦夷草紙は写しを用いるしかなかった事が知られている(35)。

(33)浅倉有子著「北方史と近世社会」清文堂、1999年、61頁
(34)島谷著「最上徳内」吉川弘文館、昭和52年、124～128頁
(35)同上、198頁

19. 纏め(赤水の「蝦夷之図」成立時期等)

【赤水の「蝦夷之図」】

- 赤水の「蝦夷之図」の制作は、14項のように普請役全員解雇された天明7年3月～青島が「蝦夷輿地全図」を制作した寛政元年7月の間と考えられる。
- 赤水は佐藤源六郎が持ち込んだ図を写したと言いその「蝦夷之図」の地誌は、方向性を気にせず書いて航路も違い地誌の量も多い事から、地誌のほとんどない「蝦夷地墨引絵図」系統の図を原図として、数種類の資料を基に地誌を赤水側が書いて「蝦夷之図」を制作したと考えられる。
- 赤水の「蝦夷之図」は、「蝦夷地墨引絵図」には見られない航路が多数あり、位置を確認しながらの制作するので解雇された見分参加者と何度か打合せした事は間違いない。
- 毛利家の図に赤水の「蝦夷之図」と同じような配置で地誌が書かれ、且つ清書したように見える地誌に珠按のような赤水に関する事を書いていないので、解雇された見分使側が赤水と繋がりを持ちつつ独自に制作したと考えられる。
- 顕彰会が平成28年発行した長久保赤水書簡集の159頁に「蝦夷之図」は寛政2年ごろには完成していたと記されているが、今回の調査から実際はもう少し早い天明7年3月下旬から寛政元年7月までの間と考えられる。

19.1 纏め(赤水の「蝦夷松前図」の成立時期)

【赤水の「蝦夷松前図」】

- 信頼性を上げる為に「蝦夷松前図」は、千島へのロシア語表記により最上徳内が幕府(本多忠籌、ただかず)に蝦夷草紙(蝦夷国風俗人情之沙汰)を提出した寛政2年9月以降に制作されたものと考えられる。
- 刊行図の「蝦夷松前図」は、寛政2年4月の蝦夷地改正令以降に蝦夷開発が動きだした事に依る時代の要請(必要性)によって制作されたものと考えられる。
- 蝦夷開発が本格的に動き出したのは寛政3年正月に最上徳内らが動き出してからなので刊行図は寛政3年以降とも考えられる。
- 寛政4年9月には大黒屋光太夫が根室に到着し彼が持ち帰った魯西亜の図には本蝦夷が太く書かれてそれを赤水は図を写しており、またこの寛政4年5～6月は最上徳内が樺太で赤人所持魯西亜図の写しを幕府側に提出されており、まだ見つかってはいないが寛政4年のこの時期には最上徳内は精度の良い蝦夷の図を多く書いているので、これら寛政4年の蝦夷に関する図を見る前に、潰れた樺太と本蝦夷を描いた「蝦夷松前図」の制作が完了していたと考えられる。
- 従って、赤水の「蝦夷松前図」は寛政3～4年ごろと推定できる。

19.2 今回の調査で分かった事

- 老中松平定信が天明の蝦夷見分を中止させた中でも赤水は天明の蝦夷見分の資料を使って「蝦夷之図」を制作してゆく姿は恵まれた環境（御三家の水戸藩の侍講を務めていて江戸に居り、幕府の情報を入手できる立場に有った）に居たとはいえ科学者赤水を彷彿とさせるものが有る。
- 最上徳内の蝦夷国風俗人情之沙汰の巻之下、天度の里数の事に『改正輿地図（赤水図）載りたる1度は32里と有りて経緯を言わず。然れども東西往来経1度の里程に適合せり。舶師たる者、この経緯の里程を詳（つまびらか）にせざれば大洋遠沖を渡って自在は無し難し』と言っていて、タテ線を経線と見ていたことが分かる。

20. 補遺

- 天明の蝦夷見分資料に基づいて制作されたのが赤水の2つの蝦夷に関する図なので、天明の蝦夷見分後の政策に関して松平定信 - 徳川治保 - 本多忠籌 - 本多利明 - 立原翠軒が絡んでくる。よってこれら人物の書簡等を調査すると今回検討した地図の制作時期の確定資料が見つかるかもしれない。
- 特に天明以降の地元の資料の再調査や水戸の徳川ミュージアム（下記彰考館の所蔵目録）の再調査はぜひとも必要である。なお、地元の長久保家に天明より以前の宝暦年間に作成された「蝦夷談筆記」の写しと見られる資料も残されているので赤水は蝦夷を勉強していたことは確かであるが、今回は地図制作時期を検討すためなので除外した。
- 天明以降の文献を徳川ミュージアムの所蔵目録(36)から抽出

  ①「蝦夷拾遺」（天明6年）×2（佐藤玄六郎著と記載有）
  ②「蝦夷拾遺別巻」（天明6年、佐藤玄六郎著と記載有）
  ③「蝦夷談」（寛政元年、陸沈亭主人筆記）
  ④「蝦夷沿革考」
  ⑤「蝦夷新疆紀聞」
  ⑥「樺太嶋並山靼地理覚書」（今井元安手記）
  ⑦「蝦夷事畧(りゃく)」

（36）彰考館所蔵目録（国会図書館デジタル）

20.1 補遺（つづき）

⑧「蝦夷圖」×2（寛政元年）
⑨「蝦夷地圖」×2
⑩「蝦夷之図」×2
⑪「松前之絵図」
⑫「樺太東郡圖」
⑬「蝦夷地之儀書出」（山口鉄五郎）
⑭「北蝦夷記」（本多利明）
⑮「蝦夷草紙」（最上徳内）
⑯「魯西亞人差出候絵図」
⑰「蝦夷筆記」（寛政元年徳内と行動を共にした笠原五太夫の書）
⑱「北島志」（嘉永7年～翌安政元年水戸藩士豊田天功の書、水戸学大系四立原翠軒・豊田天功集、昭和18年、序の凡例に引用書目があり、この中の蝦夷地図が今回の物なのか文化4年今井の物なのか調査要）

- 水戸徳川博物館　昭和56年春季特別展―水戸藩北辺開拓の略史－に於いて1770年代に長久保赤水は、元禄時代の快風丸よる探検時の図も描いているとの記載があるので、確認してみたい。

20.2 補遺（つづき）

- 長久保光明著「地図史通論」の406頁に彰考館（現徳川ミュージアム）所蔵文献を見れば「蝦夷之図」の制作時期が分かるだろうとの記述が有って20の文献名が記載されている。今回の調査で「蝦夷之図」の制作年代が天明7年3月～寛政元年の間と考えられるので制作年代を付記して並べてみると「別本赤蝦夷風説考」以降の文献が制作年代特定には必要。

  ①「蝦夷志」（享保5年、1720年、新井白石）
  ②「蝦夷風土記」（安永3年、1774年、葛西質）
  ③「蝦夷談筆記」（宝暦6年、1756年、松宮俊仍）
  ④「蝦夷実記」（松前志、天明元年、1781年）
  ⑤「赤蝦夷風説考」（天明3年、1783年、工藤平助）
  ⑥「蝦夷拾遺」（天明6年、1786年、蝦夷見分隊の佐藤玄六郎ら）
  ⑦「別本赤蝦夷風説考」（天明8年、1788年、最上徳内）
  ⑧「蝦夷地一件」（天明元年から寛政2年、1781～1790年）
  ⑨「蝦夷一件」（寛政元年から寛政2年、1789～1790年、青島俊蔵の仕置き等）
  ⑩「蝦夷騒擾記」（寛政2年、1790年、メナシ・クナシリ騒動記）同書には寛政元年とあるが北海道大学の北方資料データには寛政2年とある。
  ⑪「蝦夷草紙」（寛政2年、1790年、最上徳内）
  ⑫「蝦夷東西考証」（嘉永7年、1852年、前田夏陰）日本大百科全書の前田夏陰の解説

地図については次頁に示す。

20.3 補遺（つづき）

- 長久保光明著「地図史通論」の406頁に記載の20文献のうち残りの地図についても追記する。なお、名称から既存出版物で確認が取れるものは文献名を記載した。しかし、同一名称のものがあり確認要。

  ⑬「蝦夷地全図」（明和3年、1766年、高木崇世芝著「近世日本の北方図研究」、北海道出版センター、37頁、252頁のもの、さらに262頁に嘉永7年、1852年、喜多野省吾作のものがあるので確認要）

  ⑭「蝦夷国全図」（天明5年、1785年、林子平）高木崇世芝著「近世日本の北方図研究」、北海道出版センター、90頁。

  ⑮「蝦夷地惣絵図」

  ⑯「蝦夷地並魯西亜山満州地形絵図」（天明6年、1786年、山口高品等）

  ⑰「古蝦夷全図」（天明6年、1786年、本多利明）

  ⑱「蝦夷全図」（名称から寛政2年、1790年、最上徳内、蝦夷国風俗人情之沙汰付図であれば前記17．1項参照）

  ⑲「蝦夷地絵図」（文化2年頃、1805年、近藤重蔵）高木崇世芝著「近世日本の北方図研究」、北海道出版センター、151頁。

  ⑳「蝦夷地図」（文化3年推定、1806年、秦檍丸（あわきまろ）のものが高木崇世芝著「近世日本の北方図研究」、北海道出版センター、163頁。 同書157頁に同じ名称で文化4年（1807年）と148頁に享和2年（1802年）の近藤重蔵の図や文政4年（1821年）のものが228頁に、さらに天保年間で今井八九郎の大型図が彰考館にもあると233頁に記載されているのでいずれなのかは確認要）。

20.4 補遺（つづき）

- 以下に示すのが北茨城の方が所持している蝦夷之図の写真である。海の部分が僅かに青色に彩色が残っている。本来であればこのまま掲載すべきであるが色褪せが激しく、分かりづらいので海の部分に残る青色を復元して使用した。

- 表紙の上部図は、北茨城の方が所持している赤水の「蝦夷之図」である。
- 表紙の下部図は、北海道大学が所蔵している赤水が刊行した「蝦夷松前図」である。

全国測量・地図 史跡探訪 第５回　　近代測量１５０ｔｈ

茨城は地図と測量の揺籃（ようらん）（ゆりかご）の地（その１）…１０月号

- 「長赤水の出し村なり」（忠敬日記）江戸時代のベストセラー・赤水図
- シーボルトが語る情報メディアとしての赤水図
- 長久保赤水何者ぞ？！ 農民階級から学問で出世
- ６１歳で水戸藩の侍講に 儒学・天文・地理学・農政学者
- 長久保赤水と水戸藩の改革

インフォメーション…９月号

公益財団法人　日本測量協会 「測量」１０月号・９月号

全国測量・地図 史跡探訪 第5回

茨城は地図と測量 揺籃（ようらん）の地（ゆりかご）（その1）

「長赤水の出し村なり」（忠敬日記）江戸の大ベストセラー・赤水図

全国を歩いた伊能忠敬の測量日記『伊能忠敬日記』には，さまざまな名所旧跡の名があげられています。8月号では一昨年新たに世界記憶遺産に指定された上野三碑（群馬県）の碑文を忠敬が写していたとご紹介しました。そんな忠敬日記の中で，常陸国・赤浜村（茨城県高萩市）を通った折に記されているのが，「長赤水の出し村なり」という一節です。忠敬にとって，「（赤浜村といえば）あの長赤水の出身地」と特記せずにはいられない情報だったのでしょう。

長赤水＝長久保赤水は，江戸時代後期から幕末・明治にかけて日本でもっとも普及した地図の作者。伊能忠敬より28歳年長で，農民階級ながら儒学をきわめ，国内外の膨大な資料を読み込んだ地理学の知識をさまざまな地図としてまとめた人です。なかでも1779（安永8）年に完成させた『改正日本輿地路程全図』は，江戸時代後期の大ベストセラー地図で，赤水の死後も長く発行され続けました。別の本の付録に付けられたり，海賊版が出回ったり。シーボルトをはじめとする外国人の手にも渡りました。大量出版された実用地図という点が，秘蔵された伊能図との大きな違い。そのため，18世紀末～幕末に向かう日本において，長久保赤水の名は，疑いなく世に轟いていました。

「しかし，現在は長久保赤水の名を知る人は少ないですね。以前は，地元でも郷土史家の方々くらいしか知らなくて。郷土の偉人なのにそれでは残念だと，1992（平成4）年に顕彰会を立ち上げて活動しています」とおっしゃるのは，顕彰会会長の佐川春久さん。今号では，佐川さんのご案内で赤水の故郷・高萩市を巡りながら，その足跡を追います。

シーボルトが語る情報メディアとしての赤水図

赤水自画像

さて赤水の地図がなぜそれほど売れたのか，理由の一つは「正確さ」にあります。赤水以前の地図は，絵師・石川流宣（いしかわともぶん）が元禄年間に発行した『日本海山潮陸図』などに代表される「絵地図」でした。街道や宿場が描きこまれて便利であるし，絵として美しいけれど，距離や位置関係はあまりあてにならないもの。対して赤水は「正確さ」を目指しました。『改正日本輿地路程全図』では，「一寸（約3㎝）が道のり十里（約40km）にあたる」とし，緯度・経度を表す方眼線も入れて，「緯度１度は約32里（約125.8km）」と示しています。このような表現の地図は，赤水以前にはほとんどなかったのです。※1

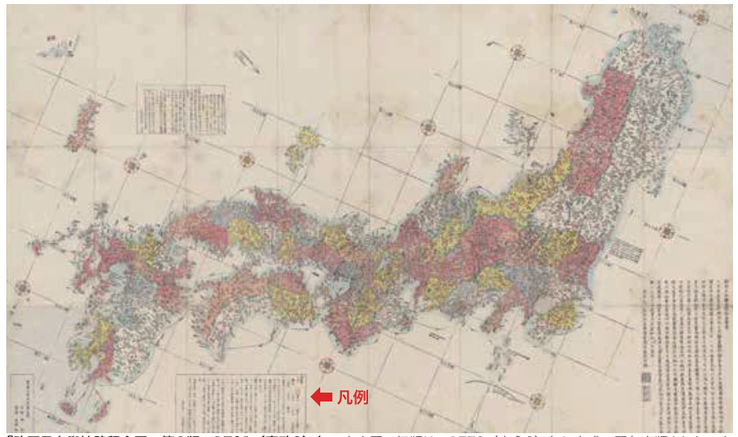
ただしこの地図が，現状，正しいといえないことも赤水は承知していて，凡例（次ページ写真参照）では，わかる限りの調整法を提示しています。

ご案内いただいたのは佐川春久氏

長久保赤水顕彰会 会長

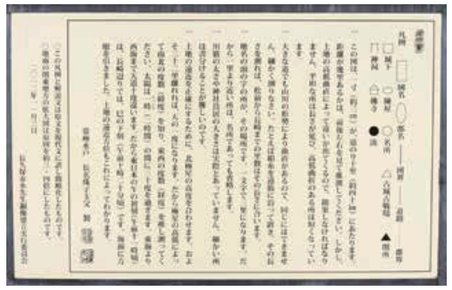
顕彰会では赤水史料の現代語訳や伝記漫画など多数刊行している。

左から星埜由尚さん，長久保片雲（源蔵：赤水の同族・長久保赤水顕彰会顧問）さん，佐川春久さん



『改正日本輿地路程全図』第2版，1791（寛政3）年　赤水図の初版は，1779（安永8）年に完成，翌年出版された。大きさは版によって違いがあり，縦85㎝前後，横130～140㎝。木版図に彩色され，多色の高価なものだと1枚25両した。序文は寛政の三博士の一人，柴野栗山。

改正日本輿地路程全図第2版の袋（複製）　携行することを勘案し，折りたたんで袋入りで販売。お伊勢参りなどが流行した当時，旅人に絶大な人気を得た。



地図凡例（原文）と現代語訳（高萩駅前・赤水図碑より）

改製扶桑分里図　改正日本輿地路程全図の原図。1768（明和5）年に完成。森幸安『日本史輿地部日本分野図』，渋川春海『天文瓊統』，西川正休『天経惑問』などを参考にした。

赤水の地図についてシーボルトはこう評しています。＜同地図には経度・緯度が記されてはいるが，メルカトール法によるとされる投影法の精確さでも，場所その他の地点の位置の正しさでも信頼は置けない。その代わりこの地図は，地誌学や統計にとっては多くの価値を持っている。そして日本の地理・歴史研究のために非常に有益な材料を提供している＞＜地図上に記入されている地理学辞典とでもいうべきものである＞※2

赤水の地図は，作図法に不足はあるものの，情報を共有するメディアとして最高峰のものであったと絶賛しています。それは，情報メディアとしての地図の意義をよく認識し，学問の一部として取り組んでいた赤水だからできた仕事だといえるでしょう。

実際，赤水が情報の更新を重要課題と考えていたことは，初版から第2版完成までの12年間に改訂を繰り返していたことからもわかります。地形の修正，潮汐情報の追加，活火山と休火山の区別など，飽くことなく改めていきました。赤水は，実測する測量人ではなかったかもしれませんが，偉大な地図人であったことは間違いありません。

長久保赤水何者ぞ?!
農民階級から学問で出世

長久保赤水（本名・守道のちに玄珠，俗名・源五兵衛）が生まれたのは，8代将軍・吉宗による享保の改革が始まったばかりの1717（享保2）年。生地の赤浜村は，水戸藩松岡領に属し，東側はすぐに太平洋が見渡せ，仙台まで続く奥州道が村内を貫いています。

赤水誕生地の碑

長久保赤水旧宅

長久保家は代々庄屋の家でしたが，父親は次男であったために赤水8歳の時に分家。その後，弟・母・父と相次いで亡くし，11歳から継母に育てられました。同族で顕彰会顧問の長久保片雲（源蔵）さんにお話をうかがうことができました。

「私が昔から聞いているのは，盆にもった砂などを使って小さい時から母親に文字を教えてもらっていたということです。何よりも学問が好きで，田んぼで馬の鼻取りをしながら本を読んだとか。それで継母の勧めで14歳から塾に通うようになったそうです」

1里離れた医師・鈴木玄淳の私塾が，後の赤水を作る土台に。ここで得た知友とともに江戸遊学を経験し，水戸藩が『大日本史』を編纂するために開いた彰考館にも出入りするようになります。百姓の仕事を果たしながらも，名越南渓（昌平黌の塾頭からのちに彰考館総裁）に師事して学才を磨いた赤水。第一義的に学んでいたのは儒学ですが，彰考館などを通じて天文・暦学に触れたことは確かです。藩の内外で儒学の講義に招かれるようになった35歳頃から地図資料を集め，写し始めるようになりました。

61歳で水戸藩の侍講に
儒学・天文・地理学・農政学者

赤水が，なぜ地図製作に興味を持ち始めたのかは，実は謎です。純粋な知的好奇心や，ある種の学問的野心があっただろうことは推測されますが，きっかけになるような出来事が書き残されているわけではありません。個々の地図の編集過程なども，海外で発見された赤水地図，遺された資料（2017年に赤水関連資料＝地図資料・書籍・書簡など693点が県の有形文化財に指定）などをもとに，まさに本格的研究が始まったばかりといえます。

大まかにいって赤水の地図づくりは，既成の民間地図や諸藩の国絵図などを収集して基盤とし，天文学については渋川春海の緯度数値などを使ったと考えられています。その他，◆旅人を招いて見聞を集める　◆多くの知識人と交流する，など赤水は人的ネットワークを築いて生の情報をつかんでいたようです。その意味で赤水が求心力のある人物であったことも想像されます。地図に関わる赤水の後半生を以下にまとめます。

1760（宝暦10）年44歳　東北を旅する。

1767（明和4）年51歳　安南国（ベトナム）漂流民の引き取りに隣村の庄屋代理として長崎に向かう。

1768（明和5）年52歳　『改製扶桑分里図』完成。水戸藩の郷士格となる。

改正日本輿地路程全図・初版以降の下北半島　修正前　初版の年からすでに部分的な修正がスタート。

赤水手書きの修正の跡　今年，赤水の修正過程を示す貴重な資料がご子孫宅から見つかった。

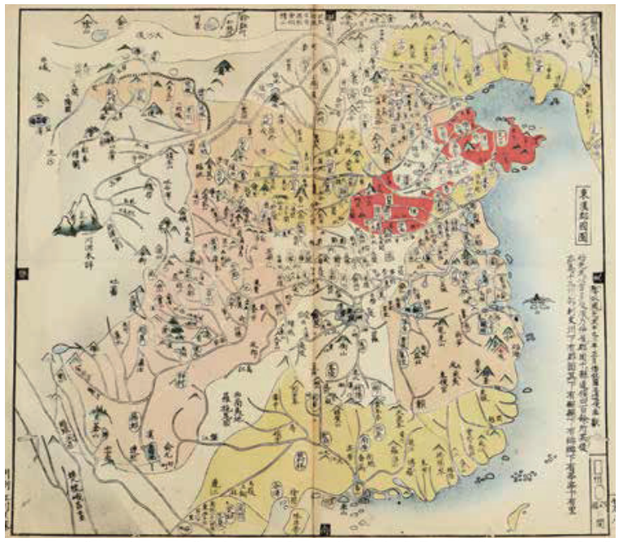
修正後　下北半島の形が訂正され，地名も増えている。地名表記数は初版の約4200から2版では約6000に。

1773（安永2）年57歳　『芻蕘談（すうじょうだん）』を著し藩政に意見。

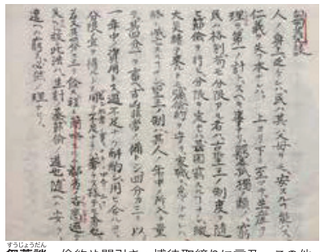
1774（安永3）年58歳　京都・大阪を旅し，名のある学者・学僧・書肆を訪ねる。翌1775年，序文が完成。

1777（安永6）年61歳　6代水戸藩主治保（27歳）の侍講に。江戸・小石川の水戸藩邸内の儒者長屋に住む。

1779（安永8）年63歳　『改正日本輿地路程全図』が完成。翌1780年，大坂で出版される。



唐土歴代州都沿革地図　夏王朝から明末までの歴代州都を書き込み年代順に12枚にまとめたもの。各藩校で学習用に使われた。



芻蕘談（すうじょうだん）　倹約や間引き・博徒取締りに言及。この他，年貢米徴収の方法に意見した書『農民疾苦』もある。

大日本史地理志草稿　赤水は博覧強記ともいうほど地理学をきわめ，水戸学の一角を担った。

1783（天明3）年67歳　『大清広輿図』完成。
1785（天明5）年69歳　『改正地球万国全図』完成。翌1786年より『大日本史地理志』編集に従事
1789（寛政元）年73歳　『唐土歴代州都沿革地図』完成。
1797（寛政9）年81歳　江戸から赤浜へ帰郷する。

伊能忠敬と同じく，赤水は後半生を輝かせた人だといえます。

長久保赤水と水戸藩の改革

「赤水は51歳で長崎に行っています。たぶん日本地図製作中の赤水は，好機到来と願い出て，適任者として命ぜられたのだと思います。長崎では清国人と筆談をして，漢詩のやりとりもできたとか。そんなこともあり，歴年の学問の功績が認められ，郷士になっています」と佐川さん。

その後，赤水は郡奉行からの依頼で『芻蕘談』を書き上げて改善策を提言。地図製作も着々と進行。博識多才の人として名声が高まり，水戸藩の侍講に上りました。

水戸藩侍講の立場から，貴重な情報（田沼意次が派遣した蝦夷地探検隊員から聞き取り調査するなど）も得られるようになり，赤水の『蝦夷之図』の成果にも結びつきました。また，藩主・治保が進める『大日本史』の校訂・増補作業において赤水は地理志の執筆も命じられました。

「水戸というと光圀や斉昭ばかりが語られますが，6代藩主・治保は中興の祖。治保が実行した財政改革が水戸を支え，幕末につながります。その治保の先生が赤水だったのです。間引き防止など治保が行った農村政策も赤水の提言による可能性が大きいです」

治保と赤水主従の絆はかたく，1791（寛政3）年，『改正日本輿地路程全図』の2版が完成した年には，治保は赤浜の赤水の家に立ち寄り，家族15人が拝謁。赤水生涯の栄光を味わいました。

赤水が亡くなったのは1801（享和元）年7月23日。享年85。伊能忠敬の第2次測量隊が赤浜村を通る10日ほど前のことでした。

9代藩主・斉昭から赤水子孫に下賜された詩文付き扇の碑　赤水旧宅には，水戸藩主が3人（6代，8代，9代）も訪れた。

長久保赤水の墓　赤浜村，潮騒の聞こえる松林内。碑文は治保の弟で宍戸藩主・松平頼救によるもの。幕末，脱藩した吉田松陰が東北を旅した時に墓参している。

※1手描きでは1754（宝暦4）年に森幸安によって『日本史輿地部日本分野図』が出されている。
※2『日本』中井晶夫訳/雄松堂書店（高萩市民文化誌『ゆずりは』・「赤水図は海を越えて」馬場章より）

取材・文　**中田ひとみ**（編集・ライター）
月刊『測量』では，「博物館めぐり」「ドキュメント 技術をつくったエンジニア」「映画 劔岳 点の記 出演者インタビュー」などを担当した。

Information（お知らせ）

長久保赤水顕彰会
『改正日本輿地路程全図』（よち）原寸大レプリカの発行について

江戸時代の庶民が使っていた日本地図は，伊能忠敬（1745～1818）の『伊能図』ではなく，長久保赤水（1717～1801）が作った『赤水図』だったことは，殆ど知られていません。

『伊能図』は江戸幕府の秘図で，明治初年まで庶民の目に触れることはありませんでした。あの有名な吉田松陰もこの『赤水図』を絶賛し，伊能忠敬が測量に携帯していたのも，実はこの『赤水図』だったのです。まさに，明治維新のエネルギーの起爆剤的な役割を果たした地図こそ，この長久保赤水が作った『赤水図』だったのです。

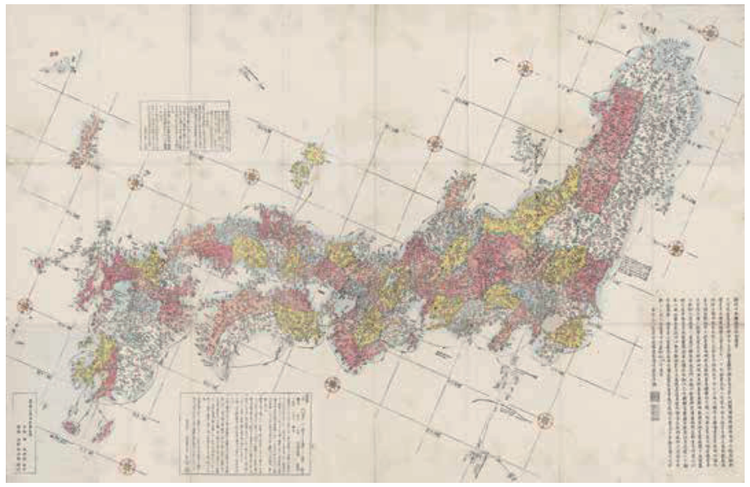
長久保赤水顕彰会では，江戸時代後期の約100年間のロングベストセラーだった『赤水図』を，令和元年の記念品として，５月１日付で『改正日本輿地路程全図』原寸大レプリカ（複製図：84.6×128.8㎝）を発行しました。赤水生存中の集大成ともいえる寛政３年（1791）発刊の第２版です。このたび，寛政３年の販売当時の袋（のし・レプリカ）に同封して，1,000円で販売中です。

実は，約6,000もの地名が掲載されている『赤水図』は，すでに鎖国の江戸時代に海を渡り，ヨーロッパやロシアなどで，日本国の基本図として利用され，発行されていたのです。クルーゼンシュテルン，クラプロート，アロースミスなどの日本図にも利用されていました。またシーボルトコレクションなど世界６カ国で44枚の赤水図が確認されています。

江戸時代にベストセラーの日本地図を作った長久保赤水の業績を漫画で紹介する『マンガ 長久保赤水物語』も，現在，好評発売中です。若い人たちや子供たちが関心を持つきっかけになればと期待しています。高萩市の主婦，黒澤貴子さん（52）作の「長久保赤水の生涯」と日立市の会社員，原康隆さん（45）の「長久保赤水の一生」の２本が単行本に収録されています。赤水に関する写真や資料，年表なども掲載しています。B６判，274ページで500円です。

（右）『マンガ 長久保赤水物語』
（中）寛政３年の販売当時の袋（のし・レプリカ）
（下）長久保赤水顕彰会のロゴマーク

○制作発行者　長久保赤水顕彰会
○問合せ先　　長久保赤水顕彰会事務局
〒318-0103　高萩市大能341　佐川春久
携　　帯：090-1846-6849
Ｅメール：haruhisasagawa@yahoo.co.jp
http//nagakubosekisui.org/



長久保赤水顕彰会
NAGAKUBO SEKISUI KENSHOKAI

（表紙の上部図）
『蝦夷之図』　　１４５．３×１７２．４㎝　　個人所蔵

（表紙の下部図）
『蝦夷松前図』　　３５×４４㎝　　北海道大学所蔵
（明治大学図書館蘆田文庫の模写図）

＊『蝦夷之図』は、見やすくするために海の部分の青色を強調している。
なお、実際の写真は補遺に示している。

赤水の「蝦夷之図」と「蝦夷松前図」の制作時期と時代背景

令和元年１１月６日
発行＝長久保赤水顕彰会

３１８－０１０３　茨城県高萩市大能３４１　佐川春久
携帯０９０－１８４６－６８４９
編集＝三浦邦明
３１８－０００３　茨城県高萩市下手綱１９５５－２
携帯０８０－３４２１－０１９６

印刷＝ふじえだ印刷

３１８－００３１　茨城県高萩市春日町１－１８
電話０２９３－２２－２１０３

《非売品》